

## 第5章 接続表現の使用と主語、述語動詞との関わり

第4章では、因果関係を表す複文における日中両言語の原因節の焦点化について意味的かつ統語的に検討し、記述した。本章では、両言語の接続表現の使用が、主語<sup>1)</sup>の制約と述語動詞の制約を受けるかどうかについて検討を行う。

日本語の因果関係を表す複文では、接続表現を用いる際に、主語による制約を受けたり、従属節の動詞の意志性の有無が関わってくる場合があるが、中国語はどうであろうか。中国語では接続表現の使用は、それとは異なった制約を受ける場合もある。接続表現を用いる場合、3つの表現類型がある。ここで中国語の接続表現をG、従属節をP、主節をQとすると、次のように表すことができる。

- ①  $\boxed{G}P, \boxed{G}Q$       ②  $\boxed{G}P, Q$       ③  $P, \boxed{G}Q$

日本語の接続表現の位置は常に従属節に後接されているのに対して、中国語の接続表現の位置は、常に従属節または主節の前にある。その位置は正しく主語の位置である。しかし接続表現を使用する際には、主語の前に置くべきか、後に置くべきか、またはどちらにも置くことができるかといったようなことを考える必要がある。

### 5.1 主語、述語動詞による構文パターンの想定

ここでは、主語、述語動詞の組み合わせを8パターンに措定し、「から・ので・ため(に)・て」文の成立条件について検討を進める。また、中国語の接続表現の使用が同様の条件で成立するか否かについても考察する。

【表29】従属節と主節における主語、述語動詞の組み合わせパターン

	従属節と主節が同一主語								従属節と主節が異主語							
	I		II		III		IV		V		VI		VII		VIII	
主語	S	S	S	S	S	S	S	S	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>	S <sub>1</sub>	S <sub>2</sub>
述語動詞	意志	意志	無意志	意志	意志	無意志	無意志	無意志	意志	意志	無意志	意志	意志	無意志	無意志	無意志
類型化	SV <sub>1</sub> 、SV <sub>1</sub>		SV <sub>2</sub> 、SV <sub>1</sub>		SV <sub>1</sub> 、SV <sub>2</sub>		SV <sub>2</sub> 、SV <sub>2</sub>		S <sub>1</sub> V <sub>1</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>1</sub>		S <sub>1</sub> V <sub>2</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>1</sub>		S <sub>1</sub> V <sub>1</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>2</sub>		S <sub>1</sub> V <sub>2</sub> 、S <sub>2</sub> V <sub>2</sub>	

注1：従属節と主節が同一主語である場合、主語はSによって示す。

注2：従属節と主節の主語が異なっている場合、S<sub>1</sub>は従属節の主語を示し、S<sub>2</sub>は主節の主語を示す。

注3：V<sub>1</sub>は意志動詞、V<sub>2</sub>は無意志動詞を示す。

注4：I～VIIIの各枠の前側は従属節、後側は主節を表す

## 5.2 同一主語による構文

### 5.2.1 「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターン

「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンは従属節と主節の主語が同一で、述語動詞が意志動詞であるものを表している。なお、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文の「S」は、形態的に常に従属節と主節ともに使用されるのではなく、一方が省略され、一方が使用されるのが一般的である。そこで、用例を挙げる際に、「S」が省略された節に、「φ」を入れ、主語が省略されたことを示す。また、ここで言う動詞の意志性の有無について判断する際に、高見（2004）<sup>2)</sup>における意志動詞と無意志動詞の定義によって判断する。高見(2004)では、動詞を意志によって分類し、次のように定義している。

意志動詞 (volitional verb) : 「読む、食べる、走る」など、人間の意志による動作を表す動詞を意志動詞と呼ぶ。

無意志動詞 (non-volitional verb) : 「降る、咲く、流れる、困る」などのように意志によるコントロールの利かない動作を表す動詞。意志によらない動作などを表す動詞。

意志動詞は「読め、読んではいけない、読める、読もう、読みたい」など、命令、禁止、可能、勧誘、希望の形を持つが、無意志動詞はこれらの形を持たない。

「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンは従属節と主節ともに意志動詞が使用されていると設定されているため、主語は有情物だとしか考えられない。なお、この種の構文の用例は極めて少なく、筆者の収集したデータの中には見当たらなかったため、以下のように、この条件に当てはまる用例について考えてみることにする。なお、構成成分を示す際、二重線は主語、一重波線は無意志動詞、点線は意志動詞を示すことにする。他のパターンも同様である。

(1) 太郎は自動車を買ったので、(φ) 試運転に行った。 (自作)

(2) 彼は人を殺したので、(φ) 警察署に自首した。 (自作)

(3) 犯人はモーターボートを奪ったので、(φ) 海から逃げた。 (自作)

(1) (2) (3)では、文頭に立つ主語の後ろに「は」が使われており、「は」は文末まで関わる機能を持つため、前後節の主語は一致していると判断できる。この点については、野田(1985)<sup>3)</sup>は「従属節の主語と主文の主語が同じときは、その主語に「は」をつける」と述べている。野田の説からも、(1) (2) (3)の主語の「太郎」「彼」「犯人」は前後節の主語になっていることがわかる。(1) (2) (3)の従属節の述語動詞の「買った」「殺した」「奪った」と主節の述語動詞の「行った」「自首した」「逃げた」に、意志性があるのは表層的な語彙からだけで判断できる。またこれらの動詞は希望や命令の形をとることができるため、意志動詞である。よって、「ので」文には、「SV1、SV1」構文パターンの条件に合うものが存在していると認められる。ここでは、前掲各用例を「から・ため(に)」に言い換えると、因果関係を表す複文として、いずれも成立する。しかし、「て」に言い換えると、因果関係が読み取りにくくなる。

(1') 太郎は新しい自動車を買って、(φ) 試運転に行った。

(2') 彼は人を殺して、(φ) 警察署に自首した。

(3') 犯人はモーターボートを奪って、(φ) 海から逃げた。

(1')~(3')の「て」文は、同一動作主による意志的動作が、「P」から「Q」の順で行われ、継起関係の意味合いが強まるため、「原因・理由」の意味合いが読み取りにくくなる。たとえば、(1)と(1')の場合、(1)については、主節で行った行為の理由は「新しい自動車を買った」ことである。「新しい自動車を買って、乗り心地がいいかどうかを知りたいので、試運転に行った」という意味合いが含まれているが、(1')については、「新しい自動車を買った。そして、試運転に行った」と解釈しなければならない。(2)と(2')について考えれば、(2)は主節で行った行為の理由は、「人を殺した」という行為である。つまり「人を殺した。だから、警察に自首した」と解釈できる。しかし(2')は「P」から「Q」の順で動作を行っており、従属節と主節には、「人を殺した。そして、警察に自首した」といった時間的継起関係しか含まれていない。(3)と(3')についても同様に解釈できる。(3)は「犯人はモーターボートを奪った。だから、海から逃げた」という意味合いが含まれているが、(3')は「犯人はモーターボートを奪った。そして、海から逃げた」といった意味合いしか含まれていない。このように、(1')~(3')は「て」を使用することによって、前後節の継起関係が前面に出され、原因・理由を表す複文の意味合いが消えて

しまう。これは、「て」によって表された因果関係が非明示的であり、「て」節のテンスの分化がないことに起因していると考えられる。

したがって、因果関係を積極的に示す「から・ので・ため(に)」文は意志動詞の制約を受けないため、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンが成立するが、因果関係を積極的に示さない「て」は意志動詞の制約を受けやすく、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」パターンの成立が許容されないと言える。

続いて、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」パターンの条件を満たす中国語の「原因・理由」を表すものを考察してみる。

中国語においても、日本語と同様に、前後節における因果関係は明示的なものと非明示的なものの何れもある。なお、中国語は、語順によって前後節の意味関係を判断できるので、前後節の意味関係をすべて接続表現によって判断するわけではない。(1) (2) (3)を中国語に訳す場合、因果関係を明示する接続表現を用いると理屈っぽくなるが、文としては成立する。ただし、接続表現を置く位置の制約を受ける場合がある。特に接続表現の“所以”を使う場合は、それを主語の前に置かなければならない。

中国語では、結果を表す接続表現の中には、主語の前と後ろのいずれにも置くことができるものもある。たとえば、“因此”“于是”などがそれである。しかし、これまでの中国語の接続表現の使用位置に関する先行研究には、主節に意味関係を表す接続表現が置かれる場合は、主語の前に置かなければならないとする見解と、一般的には主語の前に置くが、主語の後ろと前のいずれにも置くことができるものもあるとする、相反した見解も存在する。さまざまな見方はあるが、主節に意味関係を表す接続表現が置かれる場合には、主語の前に置くのが一般的であると見るのが妥当であろう。結果節に置く接続表現の位置に関して、見解はそれぞれであるが、いずれにせよ、“所以”は主節の主語の前に、接続機能のみを果たす“关联副词”の“就/便”などは主節の主語の後ろに置かなければならないのが鉄則である。

また、主語の省略に関しては、従属節と主節の主語が同一のものである場合は、その中のひとつが省略されるのが一般的である。

- (1a) <sup>(因)</sup>太郎买了新车, <sup>(結)</sup>所以 (φ) 去试车了。
- (2a) <sup>(因)</sup>他杀了人, <sup>(結)</sup>所以 (φ) 去警察局自首了。
- (3a) <sup>(因)</sup>犯人夺了汽艇, <sup>(結)</sup>所以 (φ) 从海上逃走了。

接続表現を用いなくても、文として自然であり、かつ前後節の因果関係の意味合いも読み取れる。

- (1b) (因) 太郎买了新车, (結) (φ) 去试车了。  
(2b) (因) 他杀了人, (結) (φ) 去警察局自首了。  
(3b) (因) 犯人夺了汽艇, (結) (φ) 从海上逃走了。

(1b)、(2b)、(3b)の何れにも、因果関係の意味合いが読み取れる。その理由は、従属節の内容が主節の行為の理由になれるからである。たとえば、(3b)の従属節の“夺了汽艇”は、主節の“从海上逃走了”という行為と直接結ぶことができる。もし、“夺了汽车(自動車を奪った)”と言うと、前後節の論理関係が成立できなくなる。中国語では、このように前後節の内容によって、意味関係が判断できるのが大きな特徴である。なお、この種の文は因果関係を表す接続表現が使用されておらず、前後節の因果関係は文面から解釈するしかないため、明示的な因果関係を表す複文だとは言えない。訳文 a、b は、因果関係を表す複文として成立するが、意味関係を表す機能を持っていないため、単なる時間的な前後継起を表す機能を持つ接続表現を使用すると、前後節の関係が変わってしまう。

- (1c) 太郎买了新车, (φ) 便去试车了。  
(2c) 他杀了人, (φ) 便去警察局自首了。  
(3c) 犯人夺了快艇, (φ) 便从海上逃走了。

(1c) (2c) (3c)には、何れも時間的継起関係を表す機能を持つ副詞の“便”が使用され、従属節で行った行為と主節で行った行為が、動作主の意志によって連続的に行ったものになっているため、前後節から因果関係の意味合いが読み取りにくい。これは、“便”自身が前後節の意味関係を表す機能を持たず、単なる時間的継起関係を表している機能を持つことに起因しているからである。

因果関係を表す複文においては、前後節の時間的継起関係のみを表す“便”と“就”が多く使用されている。理屈っぽいニュアンスを避けるため、明示的に因果関係を表す“因为”“所以”“因此”などより、接続機能のみを果たす“便”と“就”の使用が好まれる場合がある。しかし、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンの場合、“便”と“就”を使用すると、前

後節の関係は継起関係としか考えられなくなる。なお、この種の文においては、従属節と主節の意志的動作は同一人物による連続的なものであるため、主節の前に主語を使用することはそもそも好まれていない。主語の存在を想定するとすれば、接続表現の位置は(φ)の後ろでなければならない。これは、“便”と“就”の意味機能に起因していると考えられる。“便”と“就”の意味機能と因果関係を表す“所以”の違いについては、王维贤(1994)<sup>4)</sup>は次のように述べている。

从句法平面上看，“就”同“所以”不同，“所以”是连接两个小句的小句以外的成分，“就”是小句中的内在成分，是状语。

構文から見れば、“就”と“所以”は異なっている。“所以”はふたつの節を接続する、節以外の成分であり、“就”は節の内在的な成分であり、連用修飾である。

王(1994)の指摘からも、“就”と“便”が、主語の前に置けない理由がわかる。つまり、“所以”は文の中で独立成分として存在しており、“就”は主節に属する成分として存在しているからである。

「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンにおいては、接続表現の使用は日本語と中国語のいずれにも制約を与える場合があることが了解される。制約を与えるケースが、因果関係を明示する機能を持たないものに限られていることが、両言語の類似点のひとつだと考えられる。因果関係を明示的に表す機能を持つものは、両言語とも意志動詞の制約を受けず、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンによる因果関係を表す複文の成立が許容される。なお、これまでもふれたように、中国語では、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンの成立は、接続表現によるものに限らず、「無標(接続表現なし)」のものも許容される。また、中国語の接続表現を主節に置く場合、位置的または文法的な制約を受けやすい。ここまでの分析結果をまとめると、【表 30】のようになる。

【表30】「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	×	×
	接続表現なし	×	○

注：因果関係を明示しないものは、因果関係を積極的に示さないものと、そもそも因果関係を示す機能がなく、単なる前後節の時間的継起関係を示し、接続機能を有しているものを指す。

## 5.2.2 「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターン

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンとは、従属節と主節の主語が同一であり、従属節に無意志動詞、主節に意志動詞が用いられるものである。この種の文は、主節に意志動詞が使用されるため、主語は有情物である。まず、日本語において、この条件を満たすものについて検討してみる。

- (4) 吾輩は喉呑になったから (φ) 少し傍を離れる。 『吾』
- (5) 私はどこか探してみたいと思って、(φ) その近くの川に沿って川上に向けて行きま  
した。 『黒』
- (6) 啓造は、徹の目が涙ぐんでいるのに気づいて、(φ) ソファから身を起こした。  
 『氷』
- (7) 信吾は右に寄ったが、不安を感じて、(φ) 懐中電灯をつけた。 『山』
- (8) 吾輩は少々気味が悪くなったから (φ) 善い加減にその場を胡魔化して家へ帰った。  
 『吾』
- (9) (φ) 植えかえの時期を逸してしまうと思ったので、喜助はひとりで植えかえた。 『越』
- (10) (φ) また呼ばれたので、梶はたち止まった。 『あ』
- (11) (φ) 泉水にうつる桜に誘われて、信吾はその岸へ行った。 『山』
- (12) その時夏枝は、この嵐が、自分の結婚生活を象徴しているような不吉な予感に襲われ  
て、(φ) 思わず啓造の胸にすがりついたのだった。 『氷』
- (13) 間もなく寝入った信吾は、保子のいびきに目をさまされて、(φ) 保子の鼻をつまん  
だ。 『山』

(4)～(13)の用例には、主語が文頭に立つものもあれば、主節の前に立つものもある。野田(1985)<sup>5)</sup>では「主文と従属節の主語を表す「～は」は従属節の前におくことが多いが、従属節と主文の間におくこともある」と述べられている。上掲の用例では、(9)(10)(11)がそれである。

従属節と主節の述語動詞を見ると、従属節の動詞は状態性を持つもの、心理活動を表すもの、受動的、自発的な感覚作用を表すもの、意志動詞の受動態によるものが使用されている。「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンでは、従属節の述語動詞が無意志性のものであるため、

接続表現の使用の許容範囲が広くなり、因果関係を明示化できる接続表現だけでなく、因果関係を明示させる機能を持たないものの使用も許される。(4)～(9)の従属節の述語の「なった」、「思って」、「気づいて」、「感じて」「思った」は状態の変化を表すものと心理的状态を表すものであり、因果関係を明示化する機能を持つものより、「て」の使用の方が望ましい。というのは、継起関係を伴う「原因・理由」の「て」文では原因となる従属節は状態性を持つものを表すのが一般的だからである。

また、(10)～(13)の従属節の述語動詞の原形は意志動詞であるが、受動態を使用することによって、意志的な動作が非意志的な状態に変わって、「Pを行ったことが原因で、Qという結果になった」という文になるため、「て」の使用が許容される。上掲した用例には「ため(に)」文が含まれていないが、因果関係を明示的に示す表現であり、語彙、構文レベルの制約を受けにくいので、「て・ので・から」文との互換が許容される。以上の分析によって「SV2、SV1」構文パターンの場合、因果関係を明示するものと、因果関係を明示することができないもののいずれも成り立つことがわかる。ただし、「ため(に)」は書面語として使われるものであり、客観的な事実を報道する文章で多く使われるが、日常会話では、理屈っぽい話を避けるため、「から、ので、て」の方がより好まれていることは大方の指摘のとおりである。

一方、中国語でも、「SV2、SV1」構文パターンは成立しやすいと考えられる。「SV2、SV1」の条件に当てはまるものは、時間的な前後継起を表す“就”文と“便”文であり、継起関係を伴う因果関係を表す“于是”文も多く観察される。

[14] 她正转身要上楼去换衣服，<sup>(註)</sup> (φ) 蓦听得外面敲门的声音很急，<sup>(註)</sup> (φ) 就止步问说  
《綴》

彼女が二階へ着物を着換えに上がろうとしてふり返った途端に、(φ) 外でとてもせかせかと門を叩く音が聴こえたので、(φ) 歩みを止めて、訊ねた。 『巢』

[15] <sup>(註)</sup> 她想许久没有到园里去，<sup>(註)</sup> (φ) 就央求史夫人扶着她慢慢走出来。 《綴》

もう長いこと庭へ出たことがないと思ったので、史夫人に扶けてもらってそろそろと出てみた。 『巢』

[16] 趁这机会，阿寿挪前一步说道：“少奶奶，今天买菜的账，报一报……”<sup>(註)</sup> (φ) 看见婉小姐微微一颌首，<sup>(註)</sup> 于是阿寿便按照每天的老例，从口袋里摸出一张字条来，一边看，一边念着。 《霜》



その折を待っていたように、阿寿が一步前に出た。「奥さま。きょうの台所の勘定を申し上げます……」婉卿がかすかにうなずいたのを見<sup>て</sup>、阿寿は毎日するようにかくしから書きつけを取り出し、ひとつひとつ読み上げた。『阿』

[17] 秀才听了这“庭训”，<sup>(因)</sup> (φ) 非常之以为然，<sup>(結)</sup> (φ) 便即撤消了驱逐阿Q的建议。  
《阿》

この「庭訓」をきいて、秀才は心からなるほどと思った<sup>ので</sup>、阿Q放逐の建議を即刻撤回した。『阿』

[18] 齐刷刷一道雨线几十里拉开，横着在身后追来，<sup>(因)</sup> (φ) 看看跑不脱了，<sup>(結)</sup> (φ) 就钻进半崖上的小土窑。  
《插》

ザーッと雨脚が数十里にわたって広がり、雨域がうしろから追いかけてきて逃げられそうもなかった<sup>ので</sup>、崖の中腹にある小さな穴に逃げこんだ。《遥》

[19] 拾来正烧锅。<sup>(因)</sup> (φ) 见有省里的干部来找，<sup>(結)</sup> 二婶便推起拾来，自己烧了。《当》  
拾来は竈にちょうど火をくべていた。省の幹部が訪ねてきたのを見<sup>て</sup>、二嬢が拾来をおしのけて、自分で火をくべた。(拙訳)

[20] <sup>(因)</sup> L 夫妇知道我独在，<sup>(結)</sup> (φ) 就打电话来请我吃火锅。  
L 夫妻は私がひとりでいるのを知<sup>つて</sup>、電話で鍋を食べにくるよう誘ってくれた。(拙訳)

[14] ～ [20]の原文には、時間的な前後継起を表す“就”、“便”と、継起関係を伴う因果関係を表す“于是”が用いられている。「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文においては、“就”、“便”を使用すると、因果関係を表す複文として成り立たないが、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文においては“就”、“便”は、もっとも相応しいようである。これは、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文の従属節と主節の間には時間的要素が含まれていることと関係がある。なぜなら、従属節の動詞として変化を生じさせるものが使われているからである。

[14] ～ [20] の従属節の動詞は、それぞれ“想”“知道”“以为”のような心理的状态を表す動詞と、“听得”“看见”“看看”“见”のように、動作主に聴覚的または視覚的な情報を与える機能を果たす動詞が使用されている。つまり、従属節には「なにを思って」「なにを知って」「なにが聞こえて」「なにを見て」といったような心理的な変化あるいは視聴覚的な変化が生じている。そして、動作主の心理的な変化または視聴覚的な変化によって、主節で動作主自身のある行為が行われる。したがって、従属節と主節の間には、まず何か

変化があり、そして行動するといった時間的な要素も含有されていると言える。この種の文は、従属節と主節の間に、論理関係だけではなく、時間的な継起関係が含まれていることも明確になっている。因果関係を表すと同時に、前後節の時間的な継起関係も表す機能を持つ“于是”または、時間的な継起関係のみを表す副詞の“就”、“便”が使用されるのも当然であろう。

なお、“于是”が使用される場合は、主語の前だけでなく、主語の後ろに置くことも許容される。中国語では、主節の主語の前に意味関係を表す接続表現が置かれるのが一般的であるが、主語の前と主語の後ろの何れにも置くことができるものも存在している。たとえば、例 [16] の“于是”を主語の“阿寿”の後ろに移動しても、依然として自然さを損わない文になっている。

[16'] 趁这机会，阿寿挪前一步说道：“少奶奶，今天买菜的账，报一报……”（φ）看见婉小姐微微一颌首，阿寿于是便按照每天的老例，从口袋里摸出一张字条来，一边看，一边念着。

また、この種の文は従属節に無意志動詞が用いられているため、接続表現の使用の自由度は極めて高くなる。勿論、因果関係のみを表すものの使用も許容される。その場合は、因果関係が前面に強く出され、時間的な継起関係が不明確になる。たとえば、[15]の主節の先頭に結果を表す表現の“所以”を加えると、前後節の意味関係が変わってくるのがわかる。

[15'] 她想许久没有到园里去，所以（φ）央求史夫人扶着她慢慢走出来。

[15] では、「もう長いこと庭へ出たことがないと思った。だから、史夫人に扶けてもらってそろそろと出てみた」といった因果関係だけでなく、「もう長いこと庭へ出たことがないと思った。そして、史夫人に扶けてもらってそろそろと出てみた」といった時間的な継起関係も含まれている。それに対して、[15']は、「もう長いこと庭へ出たことがないと思った。だから、史夫人に扶けてもらってそろそろと出てみた」といった意味が明らかである。つまり、「史夫人に扶けてもらってそろそろと出てみた」という行為が行われた理由は、「もう長いこと庭へ出たことがないと思った」からである。

また、「SV2、SV1」構文パターンは、「SV1、SV1」構文パターンとは違い、主節に接続表現の使用が求められる。主節に接続表現が置かれなければ、従属節と主節のつながりが悪く、前後節の関係は従属節と主節との関係だと判断しにくくなる。たとえば、[14]の主節の冒頭の接続表現を省略すると、以下のようになる。

[14'] \* 她正转身要上楼去换衣服，蓦听得外面敲门的声音很急，止步问说

[14']は従属節と主節の間の意味関係がわかりにくくなり、前後節は関係し合うものだと判断できない。従属節にある変化が生じ、それによって主節で、ある行為が行われ、さらにその出来事は、ほぼ同時に順次に発生しているので、接続表現を使用しないと、従属節と主節の間の論理関係が消え、単なる二つの出来事を関係せずに並べているという不自然な文になってしまう。したがって、このようなほぼ同時に発生した二つの出来事を関係づけるため、主節に接続表現の使用が必須とされる。中国語は接続表現を省略したり、使用したりでき、接続表現の使用は極めて自由であるとはいえ、実際に制限される面もあるということがわかる。

また、主語の省略については、従属節の主語が省略される場合と、主節の主語が省略される場合の何れもある。従属節と主節は同一主語である場合に、一方が省略されるのがより自然だという点については、日本語と同様である。これはパターンを問わず、同主語型の共通特徴だと言える。

以上のことから、「SV2、SV1」構文パターンでは、両言語とも因果関係を明示する機能を持つものと、因果関係を明示する機能を持たないもののいずれも使用できるということがわかる。「SV2、SV1」構文パターンにおいては、従属節に無意志動詞が使用されているため、接続表現の使用に制約を受けにくいという、両言語共通の現象が見られる。また、この種の文には、因果関係だけではなく、時間的要素も含まれているため、日本語では因果関係を明示する機能を持つ接続表現より、明示する機能を持たない「て」が多用される傾向がみられる。中国語も同様の傾向が観察され、因果関係のみを表す接続表現より、因果関係を表すと同時に、時間的継起関係を表す機能も持つもの、時間的継起関係のみを表すものの方が多用される傾向にある。中国語では、接続表現の使用は任意だと言われているものの、「SV2、SV1」構文パターンにおいては、主節に接続表現の使用が必須とされている。

主節に接続表現が置かれる場合は、主語の後ろに置かなければならないものと、主語の後ろと前のいずれにも置くことができるものの2種類がある。

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンについての分析結果をまとめると、【表31】のように示すことができる。

【表31】 「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	○	○
	接続表現なし	×	×

### 5.2.3 「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターン

「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンは、従属節と主節の主語が同一であり、従属節に意志動詞、主節に無意志動詞が用いられるものである。この種の文では、従属節の述語動詞は意志動詞であるため、主語は有情物である。まず、この条件を満たす日本語の用例について検討してみる。

- (21) 僕は一日じゅう歩いたので (φ) 疲れを覚えていた。 『黒』
- (22) 太郎は授業中いたずらをしたので、(φ) 先生に叱られた。 (自作)
- (23) 彼はお台場に引越しをしたので、(φ) 毎日東京湾のきれいな夜景が見られるようになった。 (自作)

この種の文は、従属節で行われる行動によって、結果が導かれるため、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンとは異なり、従属節と主節の間に、時間的關係が読み取りにくい。「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文パターンは、主節は意志動詞が使用され、結果は状態性を持つものではなく、動作主自身のある行為が行われる。従属節と主節は同一主語であるため、動作主自身に何か起こって、そして、行動するという時間的要素が含まれている。一方、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文は動作主自身の行為によって、ある結果を引き起こすため、結果は動的な行為ではない。結果節には状態性を持つ表現、または自分の意志とは関係ない他人の動作で、その結果状態を自分の立場に立って受けるといった受身表現が使用されている。「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文は主節に状

態性を持つもの、または状態化されたものが使用されるため、因果関係を明示的に述べる「から、ので、ため」の何れも使用でき、因果関係を積極的に示さないものの使用も許容される。前掲諸例は、「ので」が用いられるもののみであるが、「て」に変えてもよい。たとえば、

(21') 僕は一日じゅう歩いて<sup>て</sup>疲れを覚えていた。

(22') 太郎は授業中いたずらし<sup>て</sup>、先生に叱られた。

(23') 彼はお台場に引越しをし<sup>て</sup>、毎日東京湾のきれいな夜景が見られるようになった。

(20') (21') (22') のいずれも因果関係を表す複文として成立する。「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンは結果が行為ではなく、状態性を持つものであるため、時間的継起関係が薄く、「て」を使用しても、継起関係は前面に出てこない。したがって、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンでは、「て」文も成り立つ。

一方、中国語では、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンの成立は、因果関係を明示的に表すもの、あるいは接続表現が使用されないものだけに限り、因果関係を示す機能を持たず、単なる時間的継起関係を示す機能を持つものの使用が許容されないようである。ここでは、前掲の諸例を中国語に訳してみる。

(21a) <sup>(因)</sup>我走了一整天, <sup>(結)</sup> (φ) 觉得很累。 (拙訳)

(22a) <sup>(因)</sup>太郎上课时淘气, <sup>(結)</sup> (φ) 被老师说了。 (拙訳)

(23a) <sup>(因)</sup>他搬到了台场, <sup>(結)</sup> (φ) 每天都能看到东京湾的美丽夜景了。 (拙訳)

(21a) (22a) (23a) はいずれも接続表現が使用されていないが、前後節の内容から、因果関係が読み取れる。(21a)は“走了一整天”という行為によって、“很累”という状態結果が導き出され、従属節と主節の論理関係がはっきりしている。(22a)は“上课时淘气”という行為より、自然に“被老师说了”という結果の発生が連想される。(23a)は東京にあるお台場に関する知識を持っていれば、従属節“搬到了台场”と主節の“每天都能看到东京湾的美丽夜景了”の間に論理関係が存在するのがわかるであろう。

(21a) (22a) (23a) は、接続表現が使用されていないものであるが、この種の文は勿論接

続表現を使用することができる。なお、接続表現を使用する場合、因果関係を明示的に示す機能を持つもののみ許容される。

(21b) (因) 我走了一整天, (結) 所以 (φ) 觉得很累。 (拙訳)

(22b) (因) 太郎上课时淘气, (結) 所以 (φ) 被老师说了。 (拙訳)

(23b) (因) 他搬到了台场, (結) 所以 (φ) 每天都能看到东京湾的美丽夜景了。 (拙訳)

(21b) (22b) (23b)にそれぞれ結果を表す接続表現の“所以”が用いられ、いずれも自然な文になっている。

この種の文は状態性を持つため、接続表現を使用するか否かという点では、自由度が非常に高いと言える。結果を表す節だけではなく、原因節に接続表現が使用される場合と、原因節と主節共に接続表現が使用される場合のいずれも自然な文になりうる。なお、この種の文は従属節と主節が同一主語であるため、原因節に接続表現が使用される場合は、主語の前と後ろの何れにも置くことができる。たとえば、

(21c) (因) 我因为 走了一整天, (結) (φ) 觉得很累。

(21d) (因) 因为我 走了一整天, (結) (φ) 觉得很累。

(21e) (因) 我因为 走了一整天, (結) 所以 (φ) 觉得很累。

(21f) (因) 因为我 走了一整天, (結) 所以 (φ) 觉得很累。

(21c) (21d) (21e) (21f)の何れも従属節に原因を表す接続表現の“因为”が使用されているが、主語の前に置かれるものと、主語の後ろに置かれるものの主語の働きと接続表現の働きが異なっている。接続表現が主語の後ろに置かれる場合、主語が一般的には話題でもあり、節と節を結びつける機能を果たしている。接続表現が主語の前に置かれる場合、従属節と主節の主語は同一主語であっても、接続表現が節と節をつなぐ機能を果たし、後ろの節と前の節をつないでいく。

しかし、(21) (22) (23)の文で因果関係を示す機能を持たず、単なる前後の時間的継起関係を示す機能を持つ“就/便”を使用すると、正しい中国語としては扱えない。

(21g) \* 我走了一整天, 就觉得很累。 (拙訳)

(22c) \* 太郎上课时淘气, **就**被老师说了。 (拙訳)

(23c) \* 他搬到了台场, **就**每天都能看到东京湾的美丽夜景了。 (拙訳)

(21g) (22c) (23c)が、文として成り立たないのは、“就”の働きがそもそも「SV1、SV2」構文に適さないからである。「SV1、SV2」構文において、従属節は動作主の行為であり、主節はその行為によって導かれた動作主自身と関係している状態の結果または状態化された結果であるため、前後節の時間的継起関係が極めて薄くなっている。この種の文においては、従属節が主節で行う行為の理由ではなく、主節の状態結果を引き起こす原因である。したがって、主節である行為が行われる時、その行為は従属節との時間的な継起関係を示す働きを持つ“就”ではこの種の文になじまないのである。

ここまでの分析を通して、「SV1、SV2」構文パターンにおいては、中国語の接続表現の使用は制約を受ける場合があるのに対して、日本語は因果関係を明示的に示すもの、もしくは因果関係を明示的に示さないもののいずれも使用できるということがわかる。

また、因果関係を明示しない「て」と、接続機能を持つが、因果関係は示さない“就/便”との使用上の違いも一層明らかである。「て」は主節の述語が状態性を持つものであっても使用できるが、“就/便”は主節の述語が意志性を持つものでなければ、使用されにくいということになる。

「SV1、SV2」構文は意志的な行為によって、ある結果が引き起こされるという特徴を持つため、従属節と主節の間の意味関係が明確になっているので、中国語では、接続表現の使用の自由度が高い。接続表現を使用しても、使用しなくても、自然な文になりうる。接続表現を使用する場合は、因果関係を明示的に示す機能を持つ表現に限られている。また、従属節に接続表現が置かれる場合、同一主語であるため、接続表現の位置は主語の制約を受けず、主語の前と後ろの何れにも置くことができる。ただし、その場合、主語と接続表現が果たしている機能が異なってくる。

「SV1、SV2」構文パターンについての分析結果をまとめると、【表 32】のように示すことができる。

【表32】 「SV1、SV2」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	○	×
	接続表現なし	×	○

#### 5.2.4 「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターン

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンは、従属節と主節の主語が同一であり、従属節と主節の述語動詞はそれぞれ無意志動詞が用いられるもので、因果関係を表す複文としては、極めて成立しやすいものと言える。「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンは意志動詞が使用されないため、主語は有情物と非情物のいずれの場合もあると考えられる。

- (24) 曽根は早く床に就いた。(φ) 疲れていたので (φ) よく眠った。 『あ』
- (25) 丘の頂上の草は、水の流れに押されて、(φ) 靡いていた。 『野』
- (26) 葉子は定子をあわれむよりも、自分の心をあわれむために (φ) 涙ぐんでしまった。 『或』
- (27) チエちゃんは、うろたえて、 (φ) 顔を可憐に赤くなさせた。 『斜』
- (28) 押しかぶさってくる慈海のうしろに、(φ) 何やら黒い影が走ったのをみたので里子  
ははッとした。 『雁』
- (29) 喜助は、この女が父に世話になったとききいて、 (φ) はッとした。 『越』

(24)～(29)では、主語が有情物になっているものがほとんどであるが、(25)のように主語が「丘の頂上の草」という非情物になっているものもある。同一主語であるため、主語の位置は、従属節にあるものと主節にあるものの何れもある。

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文は、無意志動詞が使用されているため、従属節と主節に状態動詞が用いられやすい。特に、心理的状态を表すものが多用される傾向にある。上掲用例には、「感じて」「あわれむ」「迷って」「うろたえて」などの心理的状态を表す動詞が使用されている。また、従属節に「みた」「きいて」のような動詞が用いられている場合も多くあるが、これは意識的な行為ではなく、自然に目に入った情報、または耳に入った情報であるので、人間の意志に左右されていない表現だと言える。

この種の文は、従属節のある心理的な変化、視覚的な変化、聴覚的な変化、または何らかの状態によって、主節にある状態が引き起こされるため、因果関係を明示的に示すものと、因果関係を積極的に示さないもののいずれも使用することができる。(24)～(29)の中には「から」文が含まれていないが、何れの文も「から」に置き換えることができる。

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文は、人間の意志のコントロールが及ばない構文であるため、事柄の継起関係を表すのが基本であり、因果関係を明示的に示せず、意志動詞の制約を受けやすい



「て」の使用が最適だと言える。しかし、中国語では、継起関係を表し、因果関係を表す機能を持たない“就”は、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文になじまない。“就”が「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文に適さないのは、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文の主節は意志的な動作ではなく、状態結果であるためである。ここで、“就”は「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文に適しないことをさらに裏付けるために、(24)～(29)の用例の中国語訳文を取り上げることにする。

- (24a) 曾根早早上床歇息。<sup>(因)</sup> (φ) 因为累了,<sup>(結)</sup> (φ) 睡得很香。 《情》
- (25a) 山丘上的草被流水冲刷,<sup>(因)</sup> (φ) 倒伏着。 《野》
- (26a) 叶子想到自己比定子更可怜,<sup>(因)</sup> 她的眼里一下子涌满了泪水。 (拙訳)
- (27a) 知惠小姐慌得脸颊绯红。 《斜》
- (28a) 里子看到慈海后面出现一个黑影,<sup>(因)</sup> (φ) 吃了一惊。 《雁》
- (29a) 喜助听到父亲曾照应过她,<sup>(因)</sup> (φ) 喜助惊呆了。 《越》

(24a)～(29b)の訳文では意識されたものもあれば、日本語の無意志動詞が形容詞に訳されたものもある。これは、両国語の品詞分類などの違いがあるためだと考えられる。ここで、主語と無意志動詞が原文のままに訳されるものみに下線を引くことにした。(24a)～(29a)の訳文では、“就”だけではなく、因果関係を示す機能を持つ接続表現の使用も好まれないようである。これは、中国語の接続表現の論理性が強いからだと考えられる。「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文は、人間の意志に左右されず、ある出来事によって自然にある出来事が導き出されるという因果関係の自然の成り行きが表現されているため、論理性を強める要素が好まれないのだろう。

「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンにおいては、日本語は制約を受けにくく、因果関係を明示するもの、または因果関係を明示しないもののいずれにも使用できる。一方、中国語においては因果関係を示す機能を持たない接続表現は「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文に適さないばかりか、因果関係を表す機能を持つものの使用も好まれない。これは、接続表現の論理性が強いのも原因のひとつとも考えられる。論理性の強い接続表現を使用すると、理屈っぽくなり、因果関係がむりやり前面に押し出され、言語の自然さが消えてしまうからではないか。以上のことをまとめると、【表 33】のようになる。

【表33】 「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	△
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	○	×
	接続表現なし	×	○

### 5.3 異主語による構文

#### 5.3.1 「S<sub>1</sub>V<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」構文パターン

「S<sub>1</sub>V<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」構文パターンは、従属節と主節の主語が同一主語ではなく、従属節と主節の述語動詞にそれぞれ意志動詞が用いられている構文である。この種の文において、両言語の接続表現の使用に際し、受ける制約について検討してみる。

(30) 工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわしたので、僕もその通りにした。『黒』

(31) 曹長がその電車の残骸の方へ歩いて行ったので、僕も恐る恐る近づいて行った。

『黒』

(32) 先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。『坊』

(33) アルさんが克平と三沢の居る方へ歩き出したので、三人の女も彼について行った。

『あ』

(30)は従属節の動作主は「工場長」であり、主節の動作主は「僕」である。従属節に「掻き回した」という意志動詞が使用され、主節に「掻き回す」の代動詞の「した」という意志動詞が使用されている。(31)の従属節と主節の動作主は、「曹長」と「僕」となっており、述語動詞は「歩いて行った」と「近づいて行った」といった意志動詞が使用されている。(32)の従属節と主節の動作主は、それぞれ「先方」と「おれ」になっており、述語動詞は何れも「した」が使用されている。(33)の従属節と主節の動作主は「アルさん」と「三人の女」になっており、述語動詞は「歩き出した」と「ついて行った」といった意志動詞が使用されている。

上例のような構文は、従属節と主節で異なる動作主による意志的動作が行われるため、因果関係を積極的に表す機能を持つ接続表現のみ使用できると考えられる。上例の中に「た

め」文が含まれていないが、「ため」に置き換えると、ニュアンスに違いが生じるとはいえ、非文にはならない。しかし、「て」文に置き換えると、因果関係を表す複文として極めて不自然なものとなる。

- (30') \* 工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわし<sup>て</sup>、僕もその通りにした。
- (31') \* 曹長がその電車の残骸の方へ歩いて行っ<sup>て</sup>、僕も恐る恐る近づいて行った。
- (32') \* 先方で挨拶をし<sup>て</sup>、おれも挨拶をした。
- (33') \* アルさんが克平と三沢の居る方へ歩き出し<sup>て</sup>、三人の女も彼について行った。

「S1V1、S2V1」構文が「て」文に適さないのは、従属節と主節の視点が統一されていないからである。この点について、張(1998)<sup>6)</sup>は、「ので」と「して」の使用実態について検討し、以下のように結論付けている。

主節の主語だけではなくて、従属節の主語も人間で、しかも述語動詞が意志動詞であるために、話し手の視点は両方の主語に移入し、従属節と主節とでそれぞれ自身の視点を持つことが求められることになる。「ので」節では、テンスの分化が見られ、文相当だから、独自の視点を有することができ、この需要に応えることができる。しかし、「して」節ではテンスの分化が見られなく、文相当の性格を持たないために、独自の視点を持ちえず、この需要に応えることができない。言い換えれば、「して」節を従属節に持つ複文では、全体で一文相当で、一つの視点しか持てない。しかし、主節の主語と同時に従属節の主語も人間で、述語動詞が意志動詞だと、二つの視点が存在することになり、視点の矛盾が生じてしまう。

(30')～(33')は、従属節と主節で異なる動作主に使用され、視点が統一されていないため、従属節と主節の間に、論理関係が発生せず、単なる異なる動作主によって順次に行われた行為である。これらの「て」文を因果関係を表す複文として成立させようとする、動作主を統一しなければならない。動作主を統一させると、以下ようになる。

- (30'') (僕は) 工場長が杉箸でコップのなかを掻きまわしたのを見<sup>て</sup>、僕もその通りにした。

(31”) (僕は) 曹長がその電車の残骸の方へ歩いて行ったのを見<sup>て</sup>、僕も恐る恐る近づいて行った。

(32”) (おれは) 先方で挨拶をしたのを見<sup>て</sup>、おれも挨拶をした。

(33”) (三人の女は) アルさんが克平と三沢の居る方へ歩き出したのを見<sup>て</sup>、三人の女も彼について行った。

(30”)～(33”)はそれぞれ自然に目に映った出来事によって、主節である意志的な行為が行われる「SV2、SV1」構文になっており、「て」が使用されやすい言語環境になっている。

このように、日本語では、従属節と主節の動作主が異なり、従属節と主節にそれぞれ意志動詞が用いられる場合は、因果関係を明示する機能を持たない「て」の使用が不適切となる。それを使用しようとするれば、動作主を統一させなければならないため、従属節の動作主によって行われた行為を主節の動作主による行為の中に埋め込まなければならない。

一方、中国語においては、接続表現は日本語の動詞の「て」形のように、動詞の語尾変化によって、節と節をつなぐものが存在せず、因果関係を明示的に述べるものにせよ、明示的に示さないものにせよ、何れも視点の制約を受けないと考えられる。このような特徴の有無については、(30)～(33)の中国語訳文を通して検討してみる。

- (30a) <sup>(因)</sup> 厂长用杉木筷子在杯子里来回搅，<sup>(结)</sup> 我<sup>也</sup>如法炮制。 《黒》
- (31a) <sup>(因)</sup> <sup>因为</sup>班长朝着电车残骸走去，<sup>(结)</sup> 我<sup>也就</sup>提心吊胆跟着走过去。 《黒》
- (32a) <sup>(因)</sup> <sup>因为</sup>他们先打了招呼，<sup>(结)</sup> 我<sup>也</sup>寒暄了几句。 《哥①》
- (32b) <sup>(因)</sup> 对方向俺行了礼，<sup>(结)</sup> 俺<sup>也</sup>回了礼。 《哥②》
- (32c) <sup>(因)</sup> 向我行礼，<sup>(结)</sup> 我<sup>也</sup>还了礼。 《哥③》
- (33a) <sup>(因)</sup> 乙醇朝克平和三泽那边走去，<sup>(结)</sup> 三个女士<sup>也就</sup>跟着过去了。 (拙訳)

(30)～(33)の中国語訳文においては、いずれも「も」に対する“也”が使用されている。“也”にも節と節を接続する機能があり、“关联副词”のひとつである。(30a)では“也”のみ使用されており、前後節の関係は明示できないのに対して、(31a)は従属節の前に原因・理由を表す接続表現の“因为”が使用された上に、主節にも“关联副词”の“也”“就”も使用されることによって、前後節の意味関係は明確になっている。(32)の原文に対する

複数の訳文は、(32a)では“因为”と“也”を呼応させ、用いられているが(32b)(32c)では、それぞれ“也”のみ用いられている。

(30a)(32a)(32b)(32c)の結果節には何れも“就”が使用されていないが、“就”と“也”の併用は許容されないわけではなく、“就”が省略されたと考えることもできる。この種の文は“就”に相応しいと思われる。なぜならば、「S1V1、S2V1」構文における従属節と主節の表現内容は、状態を表す表現ではなく、動的な表現であるからである。

(30a') (因) 厂长用杉木筷子在杯子里来回搅, (結) 我也就如法炮制。

(32a') (因) 因为他们先打了招呼, (結) 我也就寒暄了几句。

(32b') (因) 对方向俺行了礼, (結) 俺也就回了礼。

(32c') (因) 他们向我行礼, (結) 我也就还了礼。

中国語の因果関係を表す複文では、“就”と従属節にある原因を表す表現がペアで用いられる場合が多い。(30a')の原因節に原因を表す“因为”が用いられてもよい。勿論(32b')(32c')(33a)の原因節に、原因を表す表現を使用してもよいが、この種の構文は、前述した「SV2、SV1」文とは異なり、接続表現の使用は必須とされず、書き手の表現意図などによって、使用したり、省略したりすることが可能である。実際に、上例のいずれも(31a)のように、原因を表す“因为”と結果節にある接続機能を持つ“也”“就”を呼応させて用いてもよい。ただし、この種の文では従属節に原因を表す表現が使用される場合、動作主の前に置かなければならない。例えば、次のような文は成り立たない。

(32a")\* 他们因为先打了招呼, 我也寒暄了几句。

従属節と主節が異主語である場合、接続表現を主語の後ろに置くことができないのは、従属節の主語が話題にならず、節と節を結びつける機能を果たせないからである。

「S1V1、S2V1」構文において、従属節と主節で行われた行為は同一動作主による意志的行為ではないので、“就”のみを使用しても、連続的な継起関係にならず、従属節の動作主による行為が主節の動作主に何らかの影響を与えて、それによって行為が行われたという意味合いが読み取れる。“就”は前後節の論理関係を強める機能を持つが、因果関係を

表す機能を持たない。“就”を使用した文の意味関係は前後節の内容により読み取る。このような“就”の機能が次の用例で明らかに反映されている。

[34] 他打我，我就打他。 (自作)

彼が私を殴つたら、私は彼を殴る。

[35] 他打了我，我就打了他。 (自作)

彼が私を殴ったから、私は彼を殴った。

[34] では従属節と主節の出来事はまだ実現されていない段階であるため、仮定条件複文となり、[35] では従属節と主節の出来事は既実現されているので、因果関係を表す複文だと判断できる。このような因果関係を表す表現、または仮定条件を表す表現が置かれていない文の意味関係を判断する場合、“就”によって判断するのではなく、前後節が「已然表現」であるか、「未然表現」であるかによって判断する。

以上の分析を通して、中国語の接続表現の使用は主語が統一されているか否かといった制約より、従属節と主節の表現内容の制約を受けやすい傾向があるということが了解される。

「S1V1、S2V1」構文においては、日本語は視点の制約を受ける場合があり、接続表現の使用は、因果関係を明示的に示す表現に限られている。一方、中国語は視点の制約を受けず、接続表現の使用は因果関係を明示的に述べる表現と、接続機能のみを果たす表現のいずれの使用も可能である。ただし、従属節に接続表現が使用される場合、主語の前でなければならない。また、接続表現が使用されない場合もありうるが、因果関係を表す複文であるかどうかについて判断する場合、ゆれがある。以上の分析結果をまとめると、【表 34】のようになる。

【表34】「S1V1、S2V1」構文パターンにおける両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	×	○
	接続表現なし	×	△

### 5.3.2 「S1V2、S2V1」構文パターン

「S1V2、S2V1」構文においては、従属節と主節の主語は同一のものではなく、従属節の述語動詞は無意志動詞であり、主節の主語は意志動詞である。従属節の述語動詞は無意志動詞であるため、従属節の主語は有情物と非情物のいずれもありうる。まず、日本語の具体例を見てみる。

- (36) 花屋が一軒店を開けていたので、僕はそこで水仙の花を何本か買った。 『ノル』
- (37) 既にホームには電車がついていたので、杏子はすぐそれに乗り込んだ。 『あ』
- (38) 香りの強いコーヒーが入ったので、わたしはほんのすこし砂糖を入れた。 『挽』
- (39) バスが来たので、わたしは古瀬達巳に断りもせずさっさと乗り込んだ。 『挽』
- (40) 玄関のベルが鳴ったので、梶は如露を持ったまま、玄関の方へ回って行った。 『あ』
- (41) 喜助の顔つきが真剣に見えるので、娼妓も真顔になって話しつづけた。 『越』
- (42) 自転車が盗まれたので、太郎は歩いて学校に行った。 (自作)
- (43) 脱線事故で、電車が止まってしまったので、彼はバスで会社に行った。 (自作)
- (44) 藤川に来客があったので、それをしおに曾根と八千代は社長室を辞した。 『あ』

(36)～(44)の用例は、いずれも、前後節が異なる主語になっており、従属節に意志性が含まれていない動詞が使用されているため、「S1V2、S2V1」構文条件を満たしている。前掲諸例では従属節の主語は非情物である場合と、有情物である場合のいずれもある。(36)(37)(38)(39)(40)(42)(43)は非情物の「花屋」「電車」「コーヒー」「バス」「玄関のベル」「自転車」「電車」が従属節の主語に、(41)は有情物の人間の一部の「喜助の顔つき」が従属節の主語になっており、(44)のみ有情物の「来客」が従属節の主語になっている。主節の述語動詞は意志性を持つものであるため、主節の主語は当然有情物である。

上掲用例はすべて「ので」文になっているが、「から」「ため」と置き換えると、ニュアンス的な違いは生じるが、意味関係は変わらない。

しかし、これらの「ので」文を「て」文に変えると、因果関係を表す複文として、成立するものと、成立しないものがある。

- (36') \* 花屋が一軒店を開けていて、僕はそこで水仙の花を何本か買った。

- (37') \* 既にホームには電車がついていて□、杏子はすぐそれに乗り込んだ。
- (38') \* 香りの強いコーヒーが入って□、わたしはほんのすこし砂糖を入れた。
- (39') \* バスが来□、わたしは古瀬達巳に断りもせずさっさと乗り込んだ。
- (40') \* 玄関のベルが鳴って□、梶は如露を持ったまま、玄関の方へ回って行った。

(36')～(40')の「て」文は従属節の主語は非情物であり、述語動詞も状態を持つ表現であるが、「て」を使用すると、因果関係を表す複文だと認めがたい。しかし、(41)～(44)の「ので」を「て」に変えると、因果関係を表す複文として成り立つ。

- (41') 喜助の顔つきが真剣にみえて□、娼妓も真顔になって話しつづけた。 『越』
- (42') 自転車が盗まれて□、太郎は歩いて学校に行った。 (自作)
- (43') 脱線事故で、電車が止まってしまっ□、彼はバスで会社に行った。 (自作)
- (44') 藤川に来客があっ□、それをしおに曾根と八千代は社長室を辞した。 『あ』

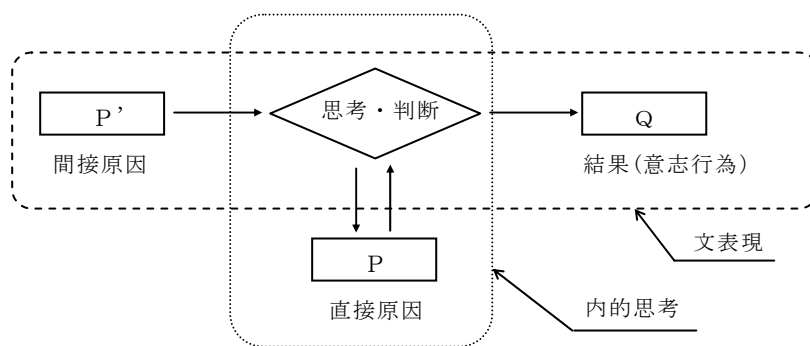
(36')～(40')が因果関係を表すものとして成り立たないのは、従属節と主節の表現内容に論理関係が含まれていないからである。「て」は「から、ので、ため」と違って、前述したように テンスの分化が見られない点があるだけではなく、因果関係を積極的に示す機能も持っていないため、「て」文の因果関係は「て」によって示されず、従属節と主節の表現内容によって示されるのである。このように、従属節と主節の表現内容の因果関係が明確ではない、或いは論理的に結ぶことができなければ、主語が非情物であれ、述語動詞が無意志動詞であれ、因果関係を表す複文としては考えられにくい。

(36')の場合は、「僕はそこで水仙の花を何本か買った」という行為を行ったのは、「花屋が一軒店を開けていて」という状態が必ずしも理由にならず、他の理由が明らかに存在している。たとえば、「花がきれいに咲いているから」といったような理由の存在が考えられる。また、(37')の場合は、「杏子はすぐそれに乗り込んだ」という行為を行ったのは、「既にホームには電車がついていて」という状態が直接的な理由にならず、「急いでいるから」といったような直接的な理由の存在が考えられる。(38')(39')(40')も同様に解釈できる。つまり、この種の文は、主節と直接的に関わっている理由を表面に出さず、人間の頭の中で考えていることが推察されるだけである。この種の文の原因と結果の関係について考える場合、「表面(間接的理由)→ 内的な思考(直接的理由)→ 意志行為」といっ



たようなプロセスで考えなければならない。文面で従属節と主節の因果関係が直接的に結びついていない文は、因果関係を積極的に述べないため、表現内容によって前後節の関係を表す「て」の使用条件を満たしていない。

従属節と主節の論理関係が間接的になっていても、「から」「ので」「ため」が使用できるのは、それらが因果関係を強く前面に出す機能があるからである。これらの表現は因果関係を明示的に述べる機能を持つとはいえ、従属節と主節の関係は直接的に結びつけられているものではないことに変わりない。このような文の形成思考をモデル化すると、以下のように図示できる。



【図13】 従属節と主節の論理関係が間接的である場合の文の形成思考モデル

(41')～(44')の「て」文が因果関係を表す複文として成立するのは、従属節と主節の因果関係は間接的ではなく、直接的に結びついているからである。たとえば、(43')の従属節の「電車が止まってしまつて」という事態は主節の「バスで会社に行った」という行為との意味関係が文面から容易に読み取れる。

因果関係を表す複文における「て」の意味機能に関して、寺村(1981)<sup>7)</sup>では、「て」形自体に「理由」の意味があるのではなく、前件・後件の意味関係からそのように解釈できる場合があるということにすぎないとし、「頭が痛くて学校を休もう」はおかしく、理由をあらわすのなら、「頭が痛いから学校を休もう」としなければならないと述べている。

寺村によれば、「て」形自身は因果関係を表す機能を持っていないため、「て」文の因果関係を読み取る時は、「て」によるのではなく、従属節と主節の内容から意味を読み取っているということになる。

以上の分析を通して、「S1V2、S2V1」構文では、「て」を使用できるものと「て」を使用できないものの2種類あることがわかった。また、どのような場合に「て」文が成立する

か、成立しないか、そうなった理由も明らかになった。続いて、中国語の「S1V2、S2V1」構文における接続表現の使用が受ける制約について検討してみる。

- [45] <sup>(原)</sup> 那土地庙早已被毁了, <sup>(結)</sup> 她就<sup>□</sup>把香插在庙前边的大树上。 《小》  
その土地廟はとっくに壊されていた<sup>□</sup>ので、彼女は線香を廟の前の大木の根もとに挿した。  
『小』
- [46] 离营地很远, 就听见一阵欢笑声, <sup>(原)</sup> 一阵急促的马蹄声清脆地响了起来, <sup>(結)</sup> 我抬头望去只  
见有几个人在那边跑马。 《天云》  
野营地からかなり離れた所で、ワッという笑い声があがり、疾駆する蹄の音がカッカッ  
とひびいてきた<sup>□</sup>ので、目を上げると何人かがそこで乗馬をやっていた。 『天雲』
- [47] <sup>(原)</sup> 小彬吃出一块糖来, <sup>(結)</sup> 女生们都笑咪咪地把目光投向他, 说吃着了了有福。 《插队》  
小彬が食べた餃子の中に砂糖のかけらが入っていた<sup>□</sup>ので、女子連中は縁起がいいと  
言ってにこにこしながら彼を眺めていた。 『遙か』
- [48] <sup>(原)</sup> 园园回来, <sup>(結)</sup> 他们就<sup>□</sup>一块儿吃起面来。 《北京》  
園園が帰ってきた<sup>□</sup>ので、ふたりでうどんを食べ始めた。 『北京』

[45] ~ [48]は従属節と主節の主語が異なっており、従属節の主語は有情物と非情物のいずれもあり、従属節にはそれぞれ状態性を持つ述語が使用されている。これらの文には、従属節の表現内容は、主節と直接的に結びつけられるものもあれば、直接的に結び付けられないものもある。たとえば、[45]の主節で行われた[她就<sup>□</sup>把香插在庙前边的大树上]という行為は、従属節の[那土地庙早已被毁了]という状態によって引き起こされたと考えられるが、[48]の主節で行われた[他们就<sup>□</sup>一块吃起面来]という行為は、従属節の[园园回来]という状態によって引き起こされたとはいえない。従属節と主節の間に[肚子饿了(おなかが空いたから)]または[面已经煮好了(うどんがもうゆであがったので)]といったような内的プロセスを経て、主節で[他们就<sup>□</sup>一块吃起面来]という行為が行われたわけではないだろうか。このように、主節と直接的に結び付けられるものは表面に出さず、人間の頭の中の一つの命題となっていることがわかる。[46][47]も[48]と同様に考えられる。従属節と主節が直接的に結び付けられず、従属節と主節の間に主節を導き出す直接的な理由が秘められていることが想像できる。

[46][47][48]は、従属節と主節との関係は間接的であるため、前後節の因果関係がやや弱い。(48)は因果関係を表す文として扱うのは無理なところもあるようだが、「園園が帰ってこないと、ご飯を食べない」という前提があると考えれば、「園園が帰ってきたので、一緒にうどんを食べはじめた」という文は、間接的な因果関係を持つものだと認められるのであろう。また、この文の間接的理由と直接的理由を全部文面に出すと、「園園が帰ってきたので、うどんもゆであがったことだから、一緒にうどんを食べはじめた」という文になるのであろう。

「S1V2、S2V1」文は従属節と主節の主語が異なっているため、中国語では、主節に接続表現が必須とされる同一主語の「SV2、SV1」構文パターンとは違って、接続表現の使用と省略はある程度自由である。主節は人間による意志的な行為であるため、“就”が用いられやすいが、“就”または他の結果節に置く接続表現が使用されなくても、文のつながりが悪くならない場合もある。たとえば、[46][47]のような文は、接続表現が用いられていないが、極めて自然な文になっている。この種の文は、主節は人間によって行われた意志的な行為であり、状態結果のような、叙述性が強い表現内容ではないため、因果関係を明示的に示す接続表現の使用は好まれない。

以上、「S1V2、S2V1」構文における両言語の接続表現の使用について検討してきた。

「S1V2、S2V1」構文では、日本語は因果関係を明示するものだけではなく、因果関係を明示しない「て」の使用が許容される場合もある。なお、「て」が使用される場合、従属節と主節の表現内容から因果関係が読み取れるものに限られている。つまり、従属節と主節の因果関係は間接的ではなく、直接的に結ぶことができるものに限られている。

一方、中国語においては、主節で意志的な行為が行われ、叙述的または説明的なニュアンスが薄いため、因果関係を明示的に述べる機能を持つものを使用するより、因果関係を示せず、時間的継起関係を表す“就”が使用されることが多い。また、従属節と主節は主語が同一ではないため、「SV2、SV1」構文パターンとは異なり、主節に接続表現を使用する場合、使用しない場合のいずれもありうる。「S1V2、S2V1」に関する分析結果をまとめると、以下のようなになる。

【表35】「S1V2、S2V1」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	△
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	×/○	○
	接続表現なし	×	○

### 5.3.3 「S1V1、S2V2」構文パターン

「S1V1、S2V2」構文パターンは、従属節と主節の主語が同一主語ではなく、従属節の述語動詞が意志動詞であり、主節の述語動詞は無意志動詞である。従属節の述語動詞は意志動詞であるため、従属節の主語は有情物に限られている。まず、日本語の具体例を見てみる。

- (49) 内儀さんが言ったので、杏子ははっとした。 『あ』
- (50) (φ) そう言ったので、杏子の気持は変った。 『あ』
- (51) 先方は私の変りはてた姿を見て分る筈もなかったが、私が声をかけたので(φ) やっとな気がついた。 『黒』
- (52) あまりにもあっさりと みんなが信じるので そのうちに僕も本当にそうなのかもしれないと思うようになった。 『ノル』
- (53) 温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨れている。挨拶をすると(うらなり君が)へえと恐縮して頭を下げるから(おれは) 気の毒になる。 『坊』
- (54) 本尊に経をあげ終った 慈念は、引磬をもって、般若心経を唱じながら廊下をわたってくる。引磬は紐でむすんだ金の棒で、(慈念は)力強く磬をたたくので、(磬が)本堂の磬子よりは強く ひびいてくる。 『雁』

(49)～(54)の文はいずれも「S1V1、S2V2」構文パターンの成立条件を満たしているものである。従属節の述語動詞は意志動詞であるため、従属節の表現内容は有情物による意志的な行為である。主節では、述語動詞は無意志動詞であるため、主語は有情物である場合と非有情物である場合のいずれのケースもある。主節の主語が有情物である場合は、動作主の心理的状态を表す表現が多用される傾向が見られる。たとえば、(49)の「はっとした」、

(50)「杏子の気持ちが変わった」、(51)の「気がついた」、(52)の「思うようになった」(53)の「気の毒になる」といったような心理的变化を表す表現が使用されている。

この種の文の従属節と主節は、従属節の動作主のある行為によって、主節のある変化が引き起こされているという関係になっている。なお、「S<sub>1</sub>V<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>2</sub>」構文は従属節と主節の主語は同一ではないため、「SV<sub>1</sub>、SV<sub>2</sub>」構文とは異なり、従属節の動作主の行為は、自分自身に影響を与えるのではなく、他者へ働きかけ、他者に変化を生じさせるということになる。

上掲用例はすべて「ので」文になっているが、「から」に言い換えると、ニュアンス的な違いが生じるが、自然さは失われない。「ため」に言い換えると、堅苦しく感じる場合があるが、文として成り立たないわけではない。しかし、「て」に変えると、文として成り立たない。(49)(51)(52)(53)では、従属節と主節の主語が有情物になっており、主節の述語は心理的状态の変化を表す表現が使用されていても、いずれの文にもふたつの視点を持つことには変わらない。ひとつの文にふたつの視点を持つ場合、「て」の使用は適さない。その理由については、5.2.1で既に詳述してある。

(50)の主節は有情物の心情が主語になっており、(54)の主節は非情物が主語になっているが、従属節は意志的な行為であるため、その意志的な行為の働きを受けるのは、行為を行ったもの自身ではなく、主節の主語である。これは、PとQが自動的・自然成立的な因果関係を表すことを基本とする「て」の機能が及ばないところであろう。ここまでの異主語構文についての分析を通して、「て」は従属節が意志行為である場合、用いられないという点が明らかになっている。

一方、中国語では、日本語と異なる制約を受けることが考えられる。中国語の接続表現の使用は視点の制約を受けないが、表現内容の制約を受ける傾向が観察される。

[55] <sup>(55)</sup> 吴遥乘我呆楞的时候，一把把我的大衣夺了下去，<sup>(56)</sup> 我踉跄了一下，几乎跌倒了。

《天云》

吴遥は私が呆然としている隙に、サッと私のオーバーをひったくったので、私はよろけてもう少しでころびそうになった。

『天雲』

[56] <sup>(55)</sup> 瞎老汉每天都爬上崖去，<sup>(56)</sup> 众人担心他迟早会摔下去，……。

《插队》

盲のじいさんが毎日崖に登るので、村人はいずれ足を踏み外すのではないかと心配するが、……。

『遥か』

[55]と[56]は、従属節の主語と主節の主語が有情物の人間になっている。[55]は従属節の動作主が意志的な行為を行い、主節の動作主が従属節の動作主の行為を受け、体の動きが見られたが、主節の動作主の動作は、ある影響によって引き起こされた動作であり、自分自身のコントロールが及ばないため、意識的な行為とはならない。このような無意志的な動作が状態結果となる場合、描写性が強いので、中国語では、接続表現を使用しないほうがより自然である。

[56]は、従属節の動作主の習慣的な行為によって、主節の主語となる“众人（村人）”の心理的な動きが引き起こされる。主節の表現内容は、主語“众人”の心理的状态について述べ、叙述性を帯びるため、接続表現を使用してもしなくても、いずれも自然さを失わない。なお、因果関係を表すと共に、継起関係も表す接続表現の“于是”と、因果関係を示せず、継起関係しか表せない“就”の使用は許容されない。なぜならば、主節は動的な表現ではないからである。

[56'] 因为瞎老汉每天都爬上崖去，所以众人担心他迟早会摔下去，

[56''] \* 瞎老汉每天都爬上崖去，于是众人担心他迟早会摔下去，

[56'''] \* 瞎老汉每天都爬上崖去，众人就担心他迟早会摔下去，

[56']は原因を表す表現の“因为”と結果を表す表現の“所以”がペアで用いられ、前後節の論理関係がはっきりしている。勿論、原因を表す表現のみ、または結果を表す表現のみを使用しても、さしつかえない。なお、接続表現の位置はいずれも主語の前でなければならない。この種の文は接続表現を使用しても、自然さを失わないとは言え、接続表現の多用は理屈っぽくなるきらいがあるので、接続表現が必須ではない場合は使用せず、表現内容によって前後節の論理関係を読み取る傾向が強い。

以上、「S1V1、S2V2」構文パターンにおける両言語の接続表現の使用について検討してきた。日本語では、因果関係を明示的に述べる表現の使用が許容されるが、因果関係を明示する機能を持たない「て」の使用は許されない。また前後節が異主語であり、従属節で意志的行為が行われる文であれば、「て」が用いられないことも明らかになった。

一方、中国語では、主節が描写性の強い表現であれば、接続表現を使用しない方がより自然である。主節は叙述性がつよい表現であれば、前後節に接続表現を使用するか否かは関係なく、いずれも自然な文になる。なお、接続表現を使用する場合、因果関係のみを表

すものに限っている。また、接続表現の位置は主語の前でなければならない。「S1V1、S2V2」に関する分析結果をまとめると以下のようになる。

【表36】「S1V1、S2V2」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○ (因果関係のみを示すものに限る)
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	×	×
	接続表現なし	×	○

#### 5.3.4 「S1V2、S2V2」構文パターン

「S1V2、S2V2」構文パターンにおいては、従属節と主節の主語は同一のものではなく、従属節の述語動詞は無意志動詞であり、主節の述語動詞も無意志動詞である。前後節の述語動詞は無意志動詞であるため、主語は有情物と非情物のいずれもある。まず、日本語の具体例について検討してみる。

(57) 風が次第に落ちて来て、煙が動かなくなったので、だんだんに（僕は）息苦しくなって来た。 『黒』

(58) 翌日九時に、曾根二郎は神田の旅館とも下宿ともつかぬ宿の一部屋で眼を覚ました。  
(曾根二郎は)十二分に眠ったので、長い旅の疲れはすっかり回復している。 『あ』

(59) 門から玄関までは御影石で敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通った時は、無暗に仰山な音がするので(おれは)少し弱った。 『坊』

(60) 土曜の夜にはみんなだいたい外に遊びに出ていたから、ロビーはいつもより人も少なくなくしんとしていた。 『ノル』

(61) 目の前に明りの出た家が一軒あつて、島村はほっとしたが、…。 『雪』

(62) あの印象があまりに永く醜酔したために、目前の乳房は、肉そのものであり、一個の物質にしかすぎなくなった。 『金』

(63) 死因——被爆による火傷である。顔面、両手とも焼けただれ、左手の皮膚が剥げ反っていた。被爆の瞬間、(その人は)防空頭巾を脱ぎかけていたために、頭髮は焼けるのを免れていた。 『黒』

(64) そのうち最前からの疲れが出て、(おれは) とうとう寝てしまった。 『坊』

(57)～(64)のいずれも、従属節の主語と主節の主語は異なっており、述語動詞はすべて無意志動詞になっている。従属節と主節の主語は、有情物である場合と非情物である場合のいずれもある。述語動詞は意志動詞ではないので、因果関係を明示的に示す機能を持つものと、そうでないもののいずれも使用することができる。この種類の文は、従属節と主節の表現内容は心理的状态を表す表現、身体的状態を表す表現や目の前の状態を表す表現が使用されており、文全体に状態描写性が強く出ている。従属節と主節の表現内容は、以下のような組み合わせが観察される。

- ・ P 周囲状態 + Q 身体的な変化 (周囲の状態によって、体のある変化が引き起こされる)  
用例 (57)
- ・ P 身体状態 + Q 身体的変化 (身体状態によって、身体的変化が生じる)  
用例 (58)
- ・ P 周囲状態 + Q 新たな状態 (周囲の状態によって、新たな状態が引き起こされる)  
用例 (60)
- ・ P 周囲の状態 + Q 心理的变化 (周囲の状態によって、心理的变化が引き起こされる)  
用例 (59) (61)
- ・ P 心理的状态 + Q 心理的状态 (心理的状态によって、新たな心理状态が引き起こされる)  
用例 (62)
- ・ P 行為状态の存続 + Q 状态結果 (意識的な動作による状态の存続によって、ある状态結果が導かれる。用例 (63)
- ・ P 身体状态 + Q 身体状态 (身体状态によって、新たな身体状态が引き起こされる)  
用例 (64)

「S1V2、S2V2」構文は意志動詞が使用されていないため、事実に基づき、客観的に述べるのが特徴なので、「から」文、「ので」文、「ため」文、「て」文のいずれも成り立つ。前掲各例の「から」「ので」「ため」文はすべて「て」に置き換えられる。「S1V2、S2V2」構文は、人間の意志によるコントロールとは関わらず、原因と結果が自動的・自然的に成立する因果関係を表す「て」には正しく最適な言語環境だと言える。次に、中国語が持つ特徴について見ていく。



- [65] (45) 死后她的牙关咬得紧紧的, (46) 两腮显得瘦进去了。 《活》  
 死顔は歯を食いしばっていたので、両頬がげっそりこけていた。 『応』
- [66] (45) 因为帽子被打掉了, (46) 他们一个个全在凛冽的寒风中光着头 『青春』  
 乱闘の中で、帽子がたたき落とされてしまったため、みんな肌をさす寒風に、はだかの頭をさらして、行進しているのだ。 『青春』

[65]の主語はそれぞれ同一人物の体の一部である。従属節の述語動詞は“咬”という意志動詞が使用されているが、情態補語<sup>8)</sup>を表すマーカーの“得”と結果状態の“紧紧的”が使用されているため、死んだ人の状態についての描写であることがわかる。また、主節の述語は“瘦”+結果補語<sup>9)</sup>の“进去”が使用されていることによって、状態結果の残存となっている。

[66]の従属節の主語は非情物の“帽子”になっており、主節の主語は“他们”になっている。従属節の述語動詞は意志動詞の“打”が使用されているが、“打”の前に受身文の典型的なマーカーの“被”が、後ろに結果状態補語の“掉了”が使用されることによって、非情物の“帽子”が有情物のある行為によって「(頭から)落ちている」という状態が描写されている。また、主節の述語の“光”の後ろに、アスペクト助詞と言われている“着”が用いられていることによって、ある状態結果の存続になっている。

このように、中国語においても、「S1V2、S2V2」構文は、状態性または描写性を持つ因果関係となっていることがわかる。ここで言う状態性と描写性は、第3章で述べた「自然現象変化の原因・理由文」とは質的な違いがあり、リアリティな効果を求めず、従属節と主節の関係は並列関係ではなく、主節の状態は従属節によって引き起こされたことが明らかになっている。ひいては、文全体に説明的なニュアンスを帯びている。上掲用例では、接続表現が使用される場合と、接続表現が使用されていない場合のいずれもある。使用される場合は、従属節の原因となる状態が、主節の他者の変化にどのような影響を及ぼしたのかということをはっきりさせる効果が生み出せる。つまり、前後節の因果関係をはっきりさせる効果がある。いずれにせよ、接続表現を使用しなくても自然なものとなっている。ただし、状態描写性を持つ文であるため、因果関係を示せず、主節が意志的行為である文で多用されている“就”を使用しにくい。

「S1V2、S2V2」構文は、描写性が強く、因果関係を示す接続表現が省略される傾向が強い中国語では、用例を収集する際、見つけにくく、論文を書くにあたって、上記の2例し

か見当たらなかった。今後さらに検討する必要がある。参考とするため、(57)～(64)の日本語用例の訳文を載せることにした。

- (57a) (因) 风渐渐小了, 烟雾不动了, (結) 而我却慢慢地喘不上气来了。 《黒》
- (58a) (因) **由于**睡得十分香甜, (結) 长途旅行后的疲劳已经不翼而飞。 《情》
- (59a) (因) 车子在这石头路上走起来嘎啦嘎啦直响, (結) 真有些受不了。 《哥》
- (60a) (因) 大家差不多都已外出游玩, (結) **因此**大厅里比平日要多少寂静一些。 《挪》
- (61a) (因) 眼前出现一间透着亮光的房子, (結) 岛不禁松了一口气。 《雪》
- (62a) (因) **由于**往昔的那种印象过于持久地在我心中发酵, (結) 眼前的乳房, 也只能是一块肥肉, 一种物质罢了。 《金》
- (63a) (因) 在爆炸的一瞬间, 刚想摘还没摘下防空头巾, (結) **所以**避免了头发被烧。 《黒》
- (64a) (因) 不知不觉疲倦起来, (結) **终于**昏昏沉沉地睡着了。 《哥》

「S1V2、S2V2」構文においては、日本語の「から」「ので」「ため」「て」のいずれも用いられるが、中国語においては、因果関係を明示的に示すもののみが使用されている。ここまでの分析をまとめて表示すると、以下ようになる。

【表37】「S1V2、S2V2」構文パターンにおける日中両言語の成立条件の異同

	接続表現の機能	日本語	中国語
明示的因果関係	因果関係を明示する	○	○ (因果関係のみを表すもの)
非明示的因果関係	因果関係を明示しない	○	×
	接続表現なし	×	○

#### 5.4 まとめ

本章では、日中両言語の因果関係を表す複文における接続表現の使用と主語、述語動詞との関わりについて8つのパターンに分けて検討してきた。以下、同主語型と異主語型における両言語の類似点と相違点についてまとめる。

## 同主語型

- ① 両言語とも、因果関係を明示的に述べる接続表現の使用は制約を受けにくい、因果関係を明示的に示す機能を持たない接続表現の使用は制約を受ける場合がある。
- ② 因果関係を明示的に示さない日本語の「て」と中国語の“就／便”はいずれも時間的継起関係を表す機能を有しているが、使用上は、異なる制約を受ける場合がある。「て」の使用範囲は“就／便”より広く、主節の表現内容の制約を受けにくい。“就／便”は主節表現内容の制約を受けやすい。主節は意志的な行為でなければ、“就／便”が用いられにくい。
- ③ 日本語の「て」と中国語の“就／便”は「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」に最も適する接続表現である。これは「て」と“就／便”の機能的な類似点だと言える。また、従属節と主節は共に意志動詞が使用される「SV<sub>1</sub>、SV<sub>1</sub>」構文においては、「て」と“就／便”は継起性を前面に出すため、使用できないという点も両者の類似点である。
- ④ 中国語の接続表現の使用と不使用は、任意であると言われているが、実際に接続表現が必須とされる「SV<sub>2</sub>、SV<sub>1</sub>」構文の存在もある。
- ⑤ 日本語では、接続表現の位置は固定されており、主語と関係していない。他方、中国語は接続表現の使用位置は主語と関係しており、原因節に接続表現が使用される場合は、主語の前と後ろの何れも可能であるが、主節に接続表現が使用される場合、主語の前に置かなければならないものと、主語の前と後ろのいずれも置けるものの2種類がある。
- ⑥ 中国語の接続表現は日本語より論理性が強いため、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」構文において、描写性を帯びた文の場合は、接続表現が使用されないほうがより自然である。

## 異主語型

- ① 異主語型において、因果関係を明示的に示す接続表現の使用は制約を受けにくい、因果関係を明示的に示さない接続表現は制約を受けやすい。これは同主語型と同様に、両言語の類似点である。
- ② 因果関係を明示的に示さない接続表現に関しては、日本語の「て」と中国語の“就

／便”は異なる制約を受けている。日本語の「て」は視点の制約を受けるため、異主語型で、従属節に意志動詞が使用される場合は、使用できないが、“就／便”が視点の制約を受けず、異主語であるかどうかと関係なく、主節に意志的な行為であれば使用できる。

- ③ 「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」文においては、従属節と主節が直接的な論理関係をもてば、「て」を使用できるが、間接的な論理関係である場合、「て」を使用できない。しかし、“就／便”は「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」では用いられやすい。すなわち、「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」文では、「て」と“就／便”の重なっている部分とずれている部分のいずれもある。また「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」では中国語の因果関係を明示的に示す接続表現の使用が好まれない。
- ④ 中国語は接続表現の位置は、異主語の場合、主節の接続表現の使用位置が限定されるだけではなく、従属節に置かれる場合も主語の前でなければならない。接続表現の使用は必須とされる場合がないが、「S<sub>1</sub>V<sub>1</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>1</sub>」構文では、接続表現が使用されないと、因果関係を表す複文であるかどうかについて判断する場合、ゆれがある。
- ⑤ 「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>2</sub>」文における中国語の接続表現の使用については、「SV<sub>2</sub>、SV<sub>2</sub>」文とは異なり、接続表現が使用される場合と、使用されない場合のいずれもありうる。「S<sub>1</sub>V<sub>2</sub>、S<sub>2</sub>V<sub>2</sub>」文が状態性または描写性を持つ因果関係となっているものの、「自然現象変化の原因・理由文」とは質的な違いがあり、リアリティのある効果を求めず、主節の状態は従属節によって引き起こされたことが明らかになっている。ひいては、文全体に説明的なニュアンスを帯びている。以上、本章の分析結果についてまとめてみた。これらを整理して表に示したのが【表 38】である。

【表38】主語、述語動詞の組み合わせパターンに関する分析結果まとめ

類型	主語		言語	因果関係	接続表現の有無	代表的な接続表現	接続表現		接続表現の位置		特徴
	従属節と主節で同じ	従属節と主節で異なる					接続表現が置かれる節	接続表現の位置			
I SV1, SV1	従属節と主節で同じ	意志動詞	日本語	明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・因果関係を明示的に示すもののみ使用される。	
							因果関係のみ示す	主節	主節の前	・接続表現は前後部の因果関係は文面から解釈する。	
							無	—	—	・接続表現を使用しない場合は前後部の因果関係は文面から解釈する。	
II SV2, SV1	従属節と主節で同じ	無意志動詞	日本語	非明示的	有	から、ので	継起関係が基本で因果関係は消極的	従属節	述語動詞の後	・従属節に無意志動詞が使用されるため、接続表現の割合が少ない。	
							接続機能のみ示す	主節	主節の後	・因果関係を明示化する機能を持つものより、「て」の使用の方が望ましい。	
							因果関係と継起関係の両方を示す	主節	主節の前または後	・主節に接続表現の使用が必要である。	
III SV1, SV2	従属節と主節で同じ	無意志動詞	日本語	明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・主節に接続表現の使用が必要である。	
							継起関係が基本で因果関係は消極的	従属節	述語動詞の後	・接続機能のみを示す接続表現の方が適切で多用される。	
							因果関係のみ示す	主節	主節の前または後	・継起関係に伴う因果関係を表す接続表現の方が適切で多用される。	
IV SV2, SV2	従属節と主節で同じ	無意志動詞	日本語	明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・主節に接続表現の使用は因果関係に表れるものに限定。	
							継起関係のみ示す	主節	主節の前または後	・接続表現は因果関係を明示的に示すものに限定。	
							無	—	—	・因果関係を明示的に示さないもの使用も許容される。	
V SV1, SV1	従属節と主節で異なる	意志動詞	中国語	非明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・因果関係を明示的に示さないもの使用も許容される。	
							因果関係のみ示す	主節	主節の前	・中国語の接続表現は日本語より論理性が強い。SV2, SV2の構文において、抽写性を帯びた文の場合、接続表現が使用されにくい傾向がある。	
							無	—	—	・視点の制約を受ける場合があり、接続表現は因果関係を明示的に表す表現に限定される。	
VI SV2, SV1	従属節と主節で異なる	無意志動詞	日本語	非明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・視点の制約を受けない使用も使用可能。	
							継起関係が基本で因果関係は消極的	従属節	述語動詞の後	・因果関係を明示的に示す接続表現はすべて使用できる。	
							接続機能のみ示す	主節	主節の後	・「て」の使用は、従属節と主節の表現内容から因果関係が読み取れるものに限定される。	
VII SV1, SV2	従属節と主節で異なる	無意志動詞	日本語	明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・主節が描写性強い表現であれば、接続表現を使用しないほうがより自然である。	
							継起関係のみ示す	主節	主節の前	・因果関係を明示的に示す接続表現はすべて使用可能。	
							無	—	—	・因果関係を明示的に示す接続表現はすべて使用可能。	
VIII SV2, SV2	従属節と主節で異なる	無意志動詞	日本語	非明示的	有	から、ので、ため	因果関係のみ示す	従属節	述語動詞の後	・接続表現は因果関係を明示的に示すものに限定。	
							継起関係のみ示す	主節	主節の前	・因果関係を明示的に示さないもの使用も許容される。	
							無	—	—	・因果関係を明示的に示さないもの使用も許容される。	

## 注

### 第5章

- 1) 本章で言う主語は、主体、主格などを含めた広義的なものである。
- 2) 高見（2004：92）による。本研究では、「意志動詞」と「無意志動詞」について判断する際、高見（2004）に従うが、「思う」「知る」「わかる」「気がする」「気付く」「感じる」といった心理状態を表す動詞を「無意志動詞」として扱う。
- 3) 野田（1985：72）参照。
- 4) 王维贤（1994：136）参照。
- 5) 野田（1985：72）参照。
- 6) 張（1998：127）では、「して」の使用と視点との関わりについて、さらに例を挙げながら、述べている。主節の主語も従属節の主語も非情物であれば、視点が関与することはない。例えば、
  - ・波が荒くて、水泳の訓練は中止になりました。また、主節の主語が人間で、従属節の主語が非情物である場合、視点が主節には行くが、従属節には視点を持たないことを示唆している。例えば、
  - ・「姉さん、サンキュー」と肇の声がして、典子はびっくりして振り向いた。
- 7) 寺村（1981：36）参照。
- 8) 刘（2005：596）は「情态补语主要指动词后用“得”连接性的表示动作的结果状态的补语、某些形容词后也可以用情态补语。（情態補語は主に動詞の後に置かれる“得”によってつなげられる動作の結果状態を表す補語のことを言う。一部分の形容詞の後にも情態補語を使用できる。）」と述べている。
- 9) 刘（2005：558）は「结果补语主要表示动作或状态的结果。结果补语由形容词和动词充任。在汉语中、当叙述由于一个动作或状态引起某种具体结果时、就应该用结果补语。（結果補語は主に動作あるいは状態の結果を表す。結果補語は形容詞と動詞によって担われる。中国語では、ある動作あるいは状態によってある具体的な結果が引き起こされる場合に、結果補語の使用が求められる。）」と記述している。